

# 同窓会会報

高知県立大学看護学部

第14号

平成29年3月30日発行

〒781-8515 高知市池2751-1



池キャンパス近郊にて

## ごあいさつ

## 同窓会副会長 中野綾美



池キャンパスから仰ぐ空も風も春の気配です。会報14号をお届けする時期となりました。看護学部同窓会の皆様におかれましては、お元気でお過ごしでしょうか。看護学部同窓会は、29年3月の卒業生・修了生をお迎えし、会員数2,087名になりましたことをご報告いたします。

さて、高知県立大学は創基70周年を迎え、11月に記念式典、記念祝賀会が開催されました。卒業生の一人として、現在、教員として在職している者として参加させていただき、先輩方に感謝するとともに、卒業生であることを心から誇りに思いました。本会報を通して、同窓生の皆様に70周年記念式典・祝賀会の様子をお伝えし、改めて私たちの大学の歴史と伝統を共有することができるように、特集として取り上げています。2月には、第31回日本がん看護学会学術集会が看護学研究科長藤田佐和先生(28期生)を会長に高知市で開催され、3,500名の看護専門職者を全国からお迎えました。学術集会では、多くの同窓生が企画・運営に参画し、座長、研究発表者、実行委員、ボランティアとして活躍されました。参加者の皆様から“高知の同窓生の結集力は素晴らしい。やっぱり高知ね。”という言葉をいただきました。

看護系大学は、近い将来300校に増える見通しです。高知県立大学看護学部は、1952年、日本で初めて4年制大学で看護学教育を始めた大学として、高知女子大学の“看護学を探究する教育”、“看護実践を大切にする教育”、“学生の個性を伸ばす教育”を脈々と継承し、次代を担う看護専門職者の教育に力を注ぐとともに、実践・教育・研究の連環の中で「看護学とは何か」を探求し、将来に拓かれた看護学の構築にチャレンジしています。網の目のように広がる同窓生のネットワークは、長年にわたって皆で作りに上げてきた財産です。歴史の中で培ってきた看護学部らしさを大切にしながら、看護学部が発展・進化していくことができるように、同窓会の活動もさらに充実させて参りましょう。

もうすぐ山々が桜色になる季節、新たな一步を踏み出す時です。南裕子学長に続いて、同窓会副会長の野嶋佐由美先生が学長に就任されます。看護学部同窓会も伝統と歴史を引き継ぎながら、新たな一步を踏み出しましょう。

## 主な内容

- ① 同窓会副会長ごあいさつ
- ② 70周年記念式典
- ③ 70周年祝賀会
- ④ 高知県立大学でご指導いただいた先生からのメッセージ
- ⑤ 第31回日本がん看護学会学術集会
- ⑥ 学生は今
- ⑦ 全国で活躍する卒業生・修了生
- ⑧ 同窓会による学生・卒業生活動支援



# 70周年記念式典



高知県立大学の歴史は、1945年8月高知県立女子医学専門学校として開校されたことから始まります。その後、1947年には高知県立女子専門学校に、1949年にはそれを母体とした高知県立高知女子大学として設立されました。家政学部に看護学科が設置されたのが1952年(昭和27年)であることは皆様もよくご存知のことと思います。

2015年はこの1945年の創基から70年目の節目にあたり、大学では1年間様々な記念行事を開催し、同窓生や県民の皆様と一緒に本学の歴史をふり返り、多くのご支援に感謝すると共に、次の時代に向けて、大学がどうあるべきかについて考え、発信してきました。この1年間の記念行事の総括として、2016年11月5日、高知県知事をはじめ本学ゆかりの方々約300人にご臨席いただき、高知県立大学創基70周年記念式典が開催されました。

記念式典では、まず高知県出身の京都造形芸術大学学長、尾池和夫先生を講師にお招きし、『地域の未来と公立大学の役割』と題して基調講演していただきました。ご講演では、先生のご専門である地球物理学・地震学の視点から、高知県の地形的特性やそこからもたらされる様々な自然や特産品、豊かな文化などについてふれられ、そうした豊かな地域特性を世界に発信することがグローバル化にもつながると話されました。こうした地域特性を充分に知り、生かした教育・研究活動が公立大学に求められる時代にあつて、本学が現在取り組んでいる「域学共生」の教育目標とその活動を高く評価して下さいました。

続く記念シンポジウムでは、高知県知事の尾崎正直氏、高知県産業振興計画委員の川村晶子氏をお招きし、南裕子学長が座長となつて『未来創生「高知県立大学」』と題して討論していただきました。これからの社会において県立大学が果たすべき役割について、尾崎知事からは、「地域課題についても学問領域で大いに取り組んで欲しいこと」「大学が社会人にとつても学び続けられる場として存在して欲しいこと」「大学が幅広い教養と深い専門性の両方を学んでいける知的基盤を持ち、それらを学び続けられる教育環境をつくること」の3点の期待が語られました。また、川村氏は、大手IT企業勤務の傍ら、自らも”私おこし”をコンセプトとしたNPOを立ち上げ、女性の起業や再就職を推進する活動を行つてこられた立場から、「これから求められるのは、既存のことを手直しする”改善”ではなく、新しいことを”改革”できる力であること」「学生にとって大学がそうした力を学べる場であること」の期待を述べられました。そして、大学がそのような場であるために、文系・理系、あるいは専門分野の垣根を越えて、新たな知識体系や知恵を創出して欲しいという期待が出されました。

また高知県の大きな課題である人口の高齢化や少子化に伴う人口減少について、まずは優秀な学生が地元に残り定住する、そんな地域を愛し、地域に根ざす人材を多く輩出してほしいことや、そのためにも、若い人が安心して子育てできるしくみづくりや、地域の特産品や暮らしの魅力を発掘しアピールすることを通して、県外からも移住者が増えるような魅力を発信して欲しいことが語られました。学生だけでなく社会人が学びなおせる環境整備についても、高知県に移住することの大きな魅力になる可能性が語られました。

シンポジウムの後の質疑では、出席していた在学生から、「県立大学になってからは、男子学生も新しい歴史を作るべくがんばっています」などの意気込みが語られたり、「今、中山間地域で活性化のお手伝いをさせていただいているが、学生が地域で活動することに対して期待されることは何か」といった質問がありました。尾崎知事からは、「中山間に住む高齢者の方々は学生たちの訪問を心待ちにしている」「若い人たちの力が高齢者の方々の地域活動に一步踏み出す原動力になっている」といった学生への大きな期待のお言葉とエールが送られ、参加する会場からもあたたかい喝采が起こりました。

70年の歴史を踏まえて、改めて本学が存在することの意義と、また新しい歴史が紡がれていく力強い息吹を実感する3時間でした。ご出席いただきました皆様に心から感謝申し上げますと共に、同窓生の皆様には、今後ともかわらぬご支援とご助言をお願い申し上げます。



# 70周年記念祝賀会



高知県立大学創基70周年式典に引き続き開催された祝賀会には、162名(学外97名、学内65名)の方々の参加のもと開催されました。

祝辞を高知県知事 尾崎正直様、高知県立大学後援会 会長 十河清様、高知県立大学同窓会しらさぎ会会長 山崎 美恵子先生(5期生)からいただき、盛大な祝賀会が行われました。



山崎美恵子先生  
(5期生・23代しらさぎ会会長)

高知県立女子医学専門学校の開校を「基」に平成27年8月に創基70周年を迎え『世界平和と文化の発展を建学の礎に、地域に根差し世界に繋がる県民大学と更なる飛躍への決意』を主旨として記念式典と祝賀会が平成28年11月5日13時半より三翠園で開催され、しらさぎ会会長の立場で11,730名の卒業生を代表してお慶びの気持ちを述べさせていただきました。過ぎし70年間は時代の趨勢と共に大学の発展に向けて度々の改組改革があり、今の「高知県立大学」として発展したことを頼もしく思っています。同時に看護学科の卒業生であり教員として在職した一人として回顧し郷愁に浸った式典でした。式次第が進行していく中で「あの時の看護学科は――」と複雑に去来することがありました。

看護学部70年の変遷を顧みますと、昭和27年4月、日本で最初の大学課程における看護教育機関として高知女子大学家政学部看護学科が発足し、今日までの70年間は看護学の発展と体系化に向けて並々ならぬ努力の積み重ねであったことを思い起こすことができます。

看護学科創設に至る経緯は故和井兼尾名誉教授によって記されていますが多くの問題点の解決におわれた日々が伺われます。発足後も学生募集・教員組織・カリキュラム・実習・学士号・学科名変更に関わる問題点。昭和30年40年代には4年制の看護大学の設置基準がなかったことが大きな支障となり4年制看護大学の発足を遅らせたこと。昭和50年には看護大学が6大学となり設置基準の共同研究を行い報告書提出。昭和54年4月第1回日本看護系大学協議会が発足し看護学の発展と体系化に努力することによって学術と教育の発展へと。昭和56年4月看護学は衛生学の範疇から独立したにも関わらず元高知女子大学では看護学科は家政学部の範疇にあり、実に看護学部として独立し大学院看護学研究科が発足したのは平成10年4月でした。この年は、高知女子大学の改革が行われた年でもありました。

看護学科発足から70年経った今日の看護学部・大学院看護学研究科看護学専攻博士前期課程後期課程・共同災害看護学専攻と発展したことは大変慶びにたえません。

いつの間にか今日の看護学の発展を当たり前のごとくに受容していた私になっていましたが、70周年式典は反省の時となり「看護史」を振り返ることの意義を再認識したことでした。



開会の挨拶  
南裕子学長



中締め挨拶  
野嶋佐由美副学長



祝賀会の様子



学生サークル演奏



多田邦子(32期生・高知大学医学部附属病院)

高知県立大学創基70周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。先日の記念講演および祝賀会に参加させていただき、大学の誕生からこれまでの発展について改めて知る機会となりました。実に頼もしい母校の存在を再認識し、卒業生であることを誇らしく感じた日でした。私は、大学には「学部」「修士」「博士」と三度の入学・卒業をさせていただきました。いずれの課程においても、先生方には温かくかつ厳しくご指導いただきました。その厳しさを兼ね備えた温かさこそが、高知県立大学の良さであり、真に学生に向き合う先生方の熱意があってこそ、高知県立大学が進化を遂げてこられたのだと思います。これからも着実に発展・進化を続け、派手さなくても熱さがある、そんな大学であって欲しいと希望しています。

## 70周年記念式典・祝賀会に参加して

### 宮武陽子(D2期生/徳島文理大学)

11月5日、高知に向かいました。高知県立大学創基70周年記念式典・祝賀会に出席するためです。

平成25年3月に大学を定年退官して以来、足が遠ざかっていたため、久しぶりの高知へのドライブです。

目に映る山並みの紅葉と黄葉が織り成す景色がとても美しく、印象的でした。高知市内が渋滞で、2分ほど遅れて会場に到着しました。受付に懐かしい顔、顔、顔。挨拶もそこそこに、すでに始まっていた南裕子学長の式辞の中、無礼を後悔しながら、席に滑り込みました。会場となった三翠園は、9年前に私が着任した際、歓迎会をして頂いた懐かしい料亭旅館です。式場には県知事名代を初め、京都造形芸術大学学長の尾池和夫先生(基調講演演者)など、そうそうたる方々が列席しておられ、厳かに次第が進行していきました。

尾池先生の基調講演、続いて、遅れて出席された尾崎知事、産業振興計画委員の川村晶子さん、南学長によるシンポジウムが進み、その過程で、私には様々な想いが去来していました。丁度、私が着任した平成20年は法人化に向けて女子大学から男女共学、学生の増員、学部再編成などの困難な課題を抱えており、変化の当時の混乱を思い出しました。また、私が生まれた年1949年に高知女子大学が開学し、現在に至るまでの幾多の先達の苦難と努力、さらに、大学教育としての看護教育の確立に苦心され、我が国の看護学教育や看護学の発展に貢献してこられた卒業生の活躍などに思いをはせながら、高知県立大学の現在の姿を支える歴史の跡、重みを噛みしめていました。そして、今、新たな地域貢献という使命を掲げて、さらなる新たな姿に生まれ変わろうとしている県立大学のあくなき挑戦への熱意を感じました。

特に印象深かったのは、南学長より、大学教育が地域に密着した暮らしを通して豊かさをはぐくむことに意味を見出すことを一つの使命とするローカル性が強調される中でも、学問を究め、真理を追究する人材づくりという大学の本来の社会的存在の意味・役割と両立させる手立てについて疑問が投げかけられました。この問いかけは深く私の胸に刺さりました。十分な意見交換の時間がなかったのは残念でしたが、これからの不透明な時代を生きる若者たちに対して、大学教育は何をすべきか、何を目指し、どこへ行くのか、その真価が改めて問われていると思いました。

記念式典・祝賀会は、短い時間の中、先輩の皆様のご矚目とした姿に触れて、大いなる刺激を受け、心地よい帰路につきました。



### 多田敏子(19期生/高知県立大学しらす会徳島支部支部長)

2016年11月5日は、私にとって忘れられない日になりました。高知県立大学しらす会徳島支部支部長を拝命していたおかげで、高知県立大学創基70周年記念式典にお招きいただき、出席することができたからです。

記念式典の冒頭に南裕子学長から、高知県立大学の70年の経過が話されました。その中で、「70年の歴史と伝統を繋いでこられた」先人への感謝のお言葉がありました。開学当初は、廃校の危機に何度も晒され、その度に教職員だけでなく、学生も存続に向けて力を注いだと言うことでした。1945年当時の状況を考えて、大学設置のご苦労は想像に絶するものであったと思います。その後70年間も組織を維持し、さらに発展させ、特に今日の厳しい競争社会のなかで大学の存在感を社会に発信し続けることへの努力は、並大抵な事ではないと思います。このような大学の素晴らしさを、記念式典の場でいたからこそ、多くの方と共有することができ、先人に対する尊敬の念が私の中でひときわ強くなりました。

また、もう一つ深く心に残ったことがあります。それは、時代が変遷しても学生を大切にする大学の校風が脈々と流れている場面が、記念式典の場で繰り広げられたことです。県内外の多くの来賓が列席されている記念式典に、在学学生が多数列席していました。それだけでなく、知事をお招きした鼎談において、学生が発言する機会が設けられました。このことは、学生を一人前として認め、一緒に歩いていく仲間として大学が認めているという事に他ならず、学生にとって誇りあるかけがえのない体験になると思います。学生の中に「高知女子大学時代の卒業生の皆さんの誇りと同じように、今自分は高知県立大学で学べることに誇りを感じています」と発言された方がおり、それに対して会場から湧き起こった拍手が、大学の未来を祝福しているように感じました。

最後になりましたが、高知県立大学の益々の発展を祈念しております。



### 廣末 ゆか(29期生/中芸広域連合保健福祉課)

高知県立大学創基70周年、おめでとうございます。この度の記念式典にあたり、田野町長が、所用のため出席できず、白羽の矢が同窓生である私共に当たり、出席の使命を仰せつかった次第です。多くの錚々たるご来賓のご臨席の中、自治体三役レベルの席に、「私は場違い？」とやや緊張した面持ちで席に座りました。周りを見渡すと、懐かしいお顔や看護関係者の方々もおられ、「代理」としての気持ちは、すっかり忘れ、「同窓生」として、「看護職」として、この価値ある記念式典に臨んでいたように思います。

式典は、南学長の式辞から始まりました。わが県立大学の歩みは、決してとんとん拍子に進んだわけでない、時代文化の流れに左右されながら、ジェンダーの変遷をもちに受け、そこに挑みながら、教育のあり方そのものを問いながらたどってきたことに、あらためて意味深く、感慨深く拝聴させていただきました。続いての基調講演では、尾池和夫先生(京都造形芸術大学学長)のご講演の凄さに魅了されました。高知の文化と先生のご専門の地震学を何の気負いもなく語られ、「地域」や「文化・生活」という現実の世界と「学問」との密接な関係とその在り方を考える機会を与えていただきました。そして、地域に根差した「学び」場としての大学の役割期待等について大いに語られたシンポジウムでは、さらなるグローバルな教育への期待が込められていたように受け止めることができました。

今、地域の教育力が落ちてきたといわれる時代です。狭義の教育にとらわれがちな施策から脱却し、誰もが「学び」の楽しさが感じられ次世代に伝えられる力を発揮できる人材を育てる…、これからの県立大学に期待できるなど、わくわくしてきました。

# 高知県立大学でご指導いただいた先生からのメッセージ

## 森下利子先生(高知県立大学名誉教授／19期生)

### 同窓会の運営に携わって

看護学部同窓会が創設されて6年が経ちます。当時、私は本学に勤めていた関係で創設に携わり、平成28年3月の定年退職まで庶務担当役員として、微力ながら関わらせていただきました。

本学にはしらさぎ会という全学の同窓会組織があり、その上に看護学部同窓会を設立しようとした意図と目的には、看護学部の定員増と平成23年からの男女共学化、それに伴う校名変更という大学改革が背景にありました。校名が変わっても、わが国で最初の看護系大学としての高知女子大学の歴史と伝統を礎にして、大学は充実・発展していくことが社会的要請としてありました。看護学部同窓会は高知女子大学の卒業生や修了生、新生なる高知県立大学の卒業生・修了生がともに同窓生として繋がり、心のよりどころとなる母校、看護学部の組織として、また全国各地で活躍する同窓生のネットワークを構築していくためにも必要でありました。

本同窓会の設立総会は、平成22年7月の真夏の暑い日、南 裕子同窓会長(当時近大姫路大学長)の下、高新RKCホールを借りて在学生も含め389名が参加して、盛大に開催されました。発足したばかりの同窓会には活動資金はなく、高知女子大学看護学会からの活動支援金と、全国各地にいる卒業生・修了生、看護学部の教員である特別会員の方々から寄せられた寄付金により賄い、活動をスタートさせることができました。

同窓会の活動事業の一つである講演会の開催は、設立以降、看護学会との共催事業として位置づけ、同窓会総会や懇親会の開催は多くの人に参加できるように、看護学会と同日、または連日に設定し今日に至っています。これらは看護学会の支援があってこそ円滑に活動を行うことができているものであり、役員一同どんなに心強くありがたく思ったかしれません。また、同窓会会報は他大学をはじめ多くの組織では年1回の発行ですが、本同窓会は全国各地で活動している同窓生に、同窓会の活動や大学・看護学部の取り組みや様々な情報を発信し、母校を身近に感じていただく機会ととらえて、年2回(9月、翌3月)発行してきました。少ない役員での会報作りは、毎回それなりに労力を費やしましたが、手元にある会報を改めて手にするとその当時が思い出され、よく頑張ったなと懐かしく思います。中でも力を入れたのは、全国で活躍している立派な先生方や先輩方を後輩や在学生たちに紹介し知ってもらうこと、また若い人たちの考えていることや意見を共有するため、突然に電話やメールを駆使して原稿を依頼し、顔写真と共に紹介しました。メッセージや声の便りからは、それぞれの方々の卒業後の活動や近況と共に、先生や友達との絆、母校への感謝、誇りや自信が綴られていて、70年余の長い歴史と伝統を育んできた母校と同窓生の存在を大変心強く感じたことでした。

看護学部同窓会の今後の発展に向けては、同窓生が母校および同窓会の活動に関心を寄せ、同窓会を支援し続けていくことではないでしょうか。



# 第31回日本がん看護学会学術集会

平成29年2月4～5日に、『がん看護の跳躍する力—未知なる世界の探求—』をテーマに、第31回日本がん看護学会学術集会が高知で開催されました。高知県立大学大学院看護学研究科長の藤田佐和教授が大会長をされました。県内外の看護職者約3,500名の参加を得て、活気のある学術集会となりました。

## 会長講演



高知県立大学大学院看護学研究科長  
藤田佐和先生

会長講演として、『がん看護の跳躍する力—未知なる世界の探求—』をテーマに講演されました。

我が国は2035年には高齢化がピークを迎え少子高齢社会となり、世界に前例のない未知なる世界を迎えます。先行きの予測が難しい今だからこそ、これまでに蓄積してきたがん看護の実践・教育・研究の叡智を礎に、未知なる成果に向けて専門領域や学問領域の壁を超越して跳躍する時期を迎えている現状をふまえ、がん患者と家族のもつ力を重視した生活を支えるケアについて、看護の役割機能の“教育”の視座から検討することについてお話されました。

教育講演 I では、本学学長の南裕子先生が『未知なる時代への看護学の挑戦』をテーマに講演されました。

我が国では、少子高齢社会の進行に伴い、「少産多死」時代を迎えます。人口問題は今後の我が国の重大な課題であり、この時代に看護職はどのような課題に直面し、どんな取り組みをしているのか問題提議されました。そして、さまざまな分野の科学技術の発展を予測し、その中で看護学にとっての2025—2060年がどのような時代であるのかを推測し、今から何を準備する必要があるのかについて講演されました。

## 教育講演 I



高知県立大学学長 南裕子先生

## 特別講演3



Asian Oncology Nursing Society理事長  
The Chinese University of Hong Kong  
Dr. Winnie K. W. SO, PhD

特別講演3では、Asian Oncology Nursing Society理事長のWinnie 先生に『アジアのパートナーシップと協働による新たながん看護学の発展』をテーマに講演していただきました。

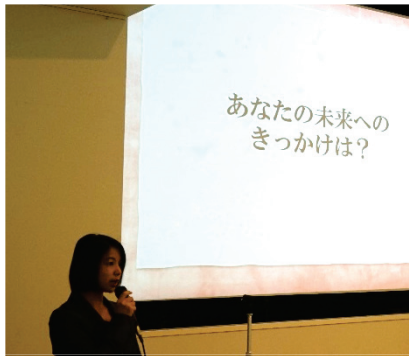
今回の特別講演では、アジア地域におけるがんの状況を概観し、がん看護師がどのように患者やその家族のQOLを向上させ、変化をもたらせているのかについてお話されました。

そして、アジアがん看護協会 (AONS) 設立の理念と実践に役立つ知見を生み出し、看護実践を前進させるための経験や専門知識を共有し、がん治療の質を向上させて患者や家族のニーズを満たす標準的なケアを開発する上で、AONSメンバーの協働の重要性について講演されました。

学術集会では、本学在学学生・修了生が、座長や学会発表、学会ボランティアとして活躍しました



シンポジウム2、特別企画2で、座長をしていただきました



ナーシングサイエンスカフェで看護の魅力を語っていただきました



「香りの看護ケア」では、アロマセラピー活用術について講義されました



たくさんの在学学生・修了生が学会発表しました



学部生が”くろしおくん“の着ぐるみを着て、参加者のおもてなしをしました



多くの在学学生・修了生が、学会のボランティアとしてサポートしてくださいました



高知らしいデザインのコンgresバッグを作りました



寒い中、ピンクのジャンパーを着て参加者の誘導をしました



高知新聞に本学術集会の記事が掲載されました



テレビ高知「テレちのたまご」で学術集会の宣伝をしました



# 学生は今

～先輩方、今の在学生たちはこんな活動をしています～

## みさとフェアに参加しました！

高知市三里地区十津小学校で行われた、第7回みさとフェアに参加してきました。今回は、子どもたちを対象に活動した学生ボランティア11名の活動を報告します。

本学は、地域住民に向けて健康意識を高めてもらうために毎年、健康に関する屋内ブースを開設しています。そのブースの一部に、子どもたちを対象とした、「子どもワクワクコーナー」があります。このコーナーは、子どもたちが自分の心臓の音を聞いてみる、脈に触れてみる<自分のからだを知ろう！>、絵本遊びができる<絵本の読み聞かせ>、高知の地場産物をテーマにしたかるた<高知・食育かるたで交流！>の3つのコーナーがあります。

学生たちは、活動開始直後は恥ずかしさも垣間見ましたが、遊びを通して子どもたちと積極的に関わっていききました。また、初めて行う子どもの血圧測定や脈拍測定に緊張しつつも、子どもが少しでも自分の身体について関心を向けることができるように日頃の講義や演習で学んだ知識を活かして関わっているのが印象的でした。

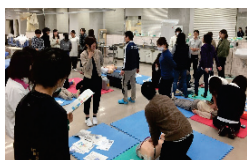


## 龍馬マラソンで医療救護ボランティアをしました！

平成29年2月19日(日)高知龍馬マラソン大会が開催されました。県立大学の学生31名は、医療救護ボランティアとして参加しました。

マラソンコースの11km～22km区間で沿道に立ち、医療救護活動に備えながら、応援を行いました。

沿道で応援しているときに、ランナーから「AEDありがとう」の言葉をいただき、学生はさらに志気を高めていました。幸いにして心肺蘇生が必要な方は皆無であり、マラソン大会も無事に終了しました。学生たちは、医療救護ボランティアの任務を終えられたことにほっとした様子でしたが、学生たちは、未来の看護を担うたくましい姿に成長しているように思いました。



## 学生自身が考え活動する【こども保健室 結】

「結 ゆい」は、子育て支援に関する活動をしているサークルです。きっかけは、授業で児童虐待に対して自分たちに何ができるかを考えたことでしたが、考えるだけではダメ！活動しよう！！と結成したチームです。スタートは、看護学部だけでしたが、現在は、健康栄養学部、社会福祉学部の3学部の学生が協働して活動しています。

目指すは、子育てに悩める保護者の方々を地域で支えこどもが安心してのびのび暮らせる仕組みづくりです。結成した昨年は、こどもと保護者の方々が交流できる場として「ゆいroom」を開催しました。そこで初めてこどもさんとふれあい、子育てをされているお母さんの生の声を聞くことができました。その中で「ゆい」がまずは地域とつながる必要があると考え、今年は虐待防止の学習会などに参加して専門職者と交流したり、地域のイベントでこどもが遊べるコーナーなどのボランティア活動を行っています。第2回「ゆいroom」の開催に向けて今、頑張っています。

活動当初は、こどもと遊ぶのもぎこちなかったのですが、どのよう

にすれば楽しいイベントができるかまで考えられるようになりました。また、地域で活動している組織とつながりもできつつあります。ご支援よろしくお祈いします。



## 精神科病院でボランティア活動をしています！

毎年、高知県内の精神科病院で開催されている病院祭や文化祭にボランティアとして参加しています。1～3年生が学年を超えて協力してくれています。今年は高知県の東部にある芸西病院と、中央部にある土佐病院の2施設のお祭りに参加しました。

はじめは緊張した面持ちだったボランティア学生も、入院患者さんと一緒に出店を回りながらお話をすることや、出店で売り子しながら患者さんやご家族の嬉しそうな笑顔に出会う度にほぐれていきました。こうした、患者さんと“楽しさ”を共有する体験や患者さんの日常に寄り添う体験は、学生にとって新鮮で、多くの学びにつながるきっかけを得たようでした。





## 医療センターとの合同災害訓練に参加しています！

平成28年11月12日(土)、高知医療センターとの合同災害訓練が実施されました。

高知県立大学からは、学生と教職員約400名が参加した訓練です。多くの学部学生は避難者として役割を担い、援助される側の体験をとおして災害発生時に自分とる行動への意識を高めました。

またそれ以外に、「立志社中」の「健援隊」は軽症者受け入れチームを、「イケあい学生ボランティアセンター」は、避難所運営に携わりました。「いけいけサロン活動」は、池キャンパス周辺の住民の方と災害に関する意見交換会を行いました。それぞれの学生が、発災をイメージしながら能動的に動くことができました。

訓練終了後には、DNGL大学院生(共同災害看護学専攻)と一緒に、それぞれのチームで活動した学部学生が、担当した役割での活動を振り返り、課題の整理を行いました。

### 【いけいけサロン活動】の学生の様子



災害に関する地域調査の結果をもとに、災害時に困ることについて住民の方と意見交換を行いました。

### 【健援隊】の学生の様子



看護学部教員と医療センタースタッフを中心とした軽症者受け入れチームの支援ができるよう、訓練しました。

## わたしたちの同窓会



### ～35期生編～

2016年7月10日に、高知女子大学家政学部看護学科35期生の同窓会を高知で開催しました。

17名の同級生は、遠くはハワイ島から、そして関東・関西・中国・四国・九州から久しぶりに集まりました。

また、1回生・4回生で学年担当をくださった松本女里先生、2回生・3回生で学年担当をくださった野嶋佐由美先生も参加してくださいました。

卒業後、四半世紀以上たった現在のことをそれぞれ自己紹介しながら、学生時代の懐かしい話、今の仕事や生活上の充実や大変さを楽しく語り合いました。現在も看護に関わっている同級生の割合が多く、嬉しかったです。近いうちに、またみんなで集まろうと計画中です。

(35期生 川上理子)

## 全国で活躍する卒業生・修了生

### “現場とのつながりを自由にそしてしなやかに～マイクロとマクロをつなげる～”

大学を卒業してちょうど30年経ちました。入学試験の面接の時に「ご主人が仕事を辞めてほしいと言ったらどうしますか？」と聞かれ「仕事に理解のある人と結婚したいと思います」と答えて笑われたことが昨日のこのように思い出されます。卒業して都内の急性期病院で働いていた頃、母が急死し、2年足らずで高知に戻ってきました。その後、産業保健の分野で保健師をしながら4人の子育てに追われていた私が、もう一度現場に戻るきっかけになったのが大学院への進学でした。当時、周囲の人たちは皆「4人も子供いるのに今さら何で？」とか「これから安定する時期なのにその職を捨てるの？」と疑問を投げかけられる度に自分の思いが固まった…あまのじゃくな性格は今も変わりません。

修士を終えて、博士在学中に高知市内の急性期病院でアルバイトしている時に臨床現場の楽しさを思い出してしまい…その後は、博士論文書きながら急性期病院の看護管理者の職に就くことになりました。我ながら、当時を振り返ると、どこにそんなパワーがあったのか不思議になります。学びながらの臨床現場だったからこそ見えてきたもの、得られたことも多かったのかもしれない。そうして得た臨床現場での学びとその後の看護教員の経験を糧に訪問看護の起業を目指して都内に拠点を移しました。今思えば、母が亡くなった50歳という節目の年を過ぎて、ちょうど自分がフリーの立場になった時、神様が、自分の人生を立ち止まって考える機会を下さったように感じました。

そうした様々な経験を糧に現在では、フリーランスの立場で看護を楽しんでいます。それは、とある急性期病院での看護管理者コンサルテーション、看護協会やセミナーでの講義、学部生や院生への講義、学会活動、研究活動そして…時には病棟業務のアルバイトまで多岐にわたります。それらの経験はすべて私の根っこになって、次の活動に繋がっていきます。現場の「今」を見つめながら「先」を見据えた活動をしていきたいと考えています。そして、何より大事にしているのは家政学部看護学科の卒業生であること…。

看護は「生活者」を支える視点を忘れてはいけないと肝に銘じて、自分自身の毎日の日常生活も大切にすることをモットーにしています。なので、私の朝の日課は、子どもたちのお弁当作り。一体いつになったの？ 甘やかすすぎでしょう！とお叱りの声も聞こえそうですが、子離れする時期も見据えつつ、一日一日を楽しんでいます。



高知県立大学特別研究員  
久保田聡美さん(32期生)

### 「生」と「死」が交差するなかで、ケアの可能性を求めて～急性・重症患者看護専門看護師としての取り組み～

平成27年3月に看護学研究科専門看護師コース(クリティカルケア看護学)を修了し、同年に急性・重症患者看護専門看護師の資格を取得しました。サブスペシャリティは、救急看護です。資格の名称から集中治療領域が専門と捉えられることが多いのですが、集中治療領域に特化したものではなく、急性期はもちろんのこと、回復期を経て慢性期、そして終末期から死に至る過程における急激な生命の危機状態にある患者様やご家族に対して、専門性の高いケアを提供する役割を担っています。

救急医療の現場は、他領域に比べ日常的に「生」と「死」が密接しています。救急医療は、「生」を主眼に発展してきましたが2014年に日本救急医学会、日本集中治療医学会、日本循環器学会と共同で、「救急・集中治療における終末期医療に関するガイドライン～3学会からの提言～」が発表されて以降、「死」への関心が急速に高まりつつあります。しかし、まだ「生」と「死」をバランスよく考えていく風土が培われているとはいえません。



高知医療センター  
救命救急センター救急外来  
岡林志穂さん(修士16期生)

大学院には、救急外来で突然わが子を亡くしたご両親の悲嘆を目の当たりにして、看護師として無力であった経験がきっかけで入学し、修士論文では、救急外来で予期せぬ死を経験した家族の悲嘆へのケアについての研究を行いました。そして、現在、救急領域におけるEnd of Life Careの充実に軸に活動をしています。

具体的な活動として、救急外来においては、心肺停止の状態で救急搬送された患者様の蘇生場面への立ち会いをご家族が希望し、ご家族への支援に専念できるスタッフの確保が出来る場合は、ご家族に立ち会いをしていただく取り組みを行っています。取り組みの中で、専門看護師としてロールモデルの役割を担い、スタッフと事例の振り返りを行うことを積み重ねています。この取り組みは、スタッフが家族の悲嘆を蘇生場面で共有することで家族の悲嘆に真摯に考える機会へと繋がっています。救命救急センターICUにおいては、初めての試みとして、多職種がそれぞれの専門性を最大限発揮し、終末期の患者様の外出を実現させました。専門看護師として主に調整を行いました。この外出は、患者様・ご家族のニーズに沿ったQuality of dyingの提供となり、スタッフにとっては、救急領域におけるEnd of Life Careの新たな形の経験となり、ケアには無限の可能性があることへの理解に繋がりました。

専門看護師として、まだまだ日々試行錯誤しながら手探りで活動を行っていますが、現場のスタッフとともに「生」と「死」に真摯に向き合える風土を築きあげていきたいです。

# 同窓会による学生・卒業生活動支援

同窓会では、卒業生の相互交流や学生の様々な活動を支援することを目的に活動しています。  
平成28年度は2つの活動を支援しました。

## 59期生の勉強会開催を支援しました



看護学部では、県内就職卒業生支援プロジェクトを平成27年度から立ち上げています。主な事業の1つ目は、就職1年目の卒業生を対象にして、臨床で苦手な技術を練習するために実習室を開放すること、調べもの支援や課題レポート作成のアドバイスを行っています。本年度も輸液ポンプ等を使った点滴管理や挿管チューブの固定の練習などに利用して頂きました。また、技術テストがある医療施設に就職した卒業生は、テストの事前学習にも利用されていました。

また、主な事業の2つ目として、卒業生の交流を図る場の提供を行っています。今年度は、8月に59期生が勉強会を行いました。59期生は、高知女子大学から高知県立大学への過渡期の中で大学生活を過ごし、また、最後の1学年45人クラスの学年でもあります。

卒業して4年目になり、クラスメートの中には、結婚や出産を経験している人もおり、また大学院の進学などについて考える仲間もいる状況でしたので、キャリアデザインについて考えることにされました。当日は、県内外を含めて13人が参加されました。3割強のクラスメートが集まったことになり、卒業後初めて会う方もおられたようです。また子どもを連れて参加してくれた方もいて、4年間ですがそれぞれの変化を感じたようです。

会では、母性助産看護学領域准教授の嶋岡暢希先生に『女性のライフイベントとキャリアデザイン』と題したご講演を頂きました。また、看護学研究科前期課程1回生の弘田智美さんに大学院に進学した理由や大学院での生活について合わせてお話し頂きました。弘田さんは59期生の2期先輩にあたり、未来の自分たちをイメージしやすかったようです。

当日は、複数の学会などがあつたようで学内におられる先生方は、少なかったのですが、ビデオメッセージなどを頂き、大変懐かしうれしく感じて頂いたようです。



## 助産活動体験を支援しました



平成28年6月～8月にかけて、同窓会からご支援をいただき、助産コースの学生が幡多けんみん病院で分娩介助の助産活動体験を行いました。学生は幡多けんみん病院のみなさまに温かく迎えていただき、10組の母子との出会いがありました。この活動を通して、高知県西部の周産期医療の実情にもふれ、母子ともに安全な分娩となるよう、医師と連携することや、助産師としての専門性など幅広い学びを得ることができました。活動中滞在したマンスリーマンションでは、キッチン、お風呂、トイレだけでなく、冷蔵庫や電子レンジ、洗濯機、布団なども完備され、快適な日常生活によって助産活動体験に集中して臨むことができました。ご支援いただきましたことを、心より感謝申し上げます。



## ご寄付をいただいた方

下記の皆様より寄付をいただきました。誠にありがとうございました。(敬称略 平成29年3月10日現在)

築田登勢子(2期) 福岡 恵美子(5期) 南 裕子(11期) 津島 ひろ江(14期) 岡本 陽子(14期)  
山田 薫(26期) 十河 尚美(30期) 千谷 伸代(31期) 野村 美紀(43期)

### 平成28年度 高知県立大学看護学部看護研究発表会



### 平成28年度 高知県立大学大学院 看護学研究科 博士前期課程 修士論文発表会



それぞれが取り組んだ  
研究活動の成果を発表し、  
活発な意見交換が行われました。

## 寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。  
寄付金は、同封の振込用紙にてお願いします。ホームページでもご覧いただけます。  
ご不明な点はいつでもお問い合わせください。

(池添・楨本・川本)

看護学部がある池キャンパスの近郊では、薄桃色の花々が見頃を迎え、春の訪れを感じさせてくれています(表紙写真)。本会報がお手元に届く頃には、高知には、桜前線が訪れています。全国の皆様のところでは、いかがでしょうか。本号では、創基70周年記念式典、第31回日本がん看護学会学術集会の記事に加え、学部の各期生が開催した同窓会の様子をお届けすることができました。勉強会を行ったり、仲間と懐かしい時間を共有したりと、時を越えても変わらない同窓生のつながりの温かさをお届けできたと思います。ぜひ、同窓会を開催した、等の情報があれば、本会までお寄せください。

編集後記

### 事務局

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部  
Fax: 088-847-8750

### ホームページアドレス

高知県立大学  
<http://www.u-kochi.ac.jp/>  
高知県立大学看護学部  
<http://www.u-kochi.ac.jp/~kango/>